

日本作文の会編

日本の 子どもの詩

福井





日本作文の会 編

日本の 子どもの詩

新潟

岩崎書店

日本の子どもの詩 15 新潟

一九八一年三月二〇日 初版発行

編者 日本作文の会

発行者 森山甲雄

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二
電話(〇三)八二二、九一三(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ぜんたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによって、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などともよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしな先生たちによる創造的な教育のいなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくரிだした芸術（現代の子どもの「わらべうた」）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「新潟編」であります。どうぞ、ひとつひとつしずかにお読みください。

もくじ



1918
~
1945

8

すみれ
あお桐

もず

9

雁

ぐみ

雪

冬の日

キシヤゴツコ

10

かえる

春

しかられた

11

子守

春

すずめ追

12

春が来る

石うすひき

13

きせる

米とき

14

夕方

15

写生

16

水

17

パンツ

18

あめふれ

19

ぎんやんま

20

はち

21

かくれ休み

22

ばんがたし(夕方)

23

きりの朝

24

野球

25

散歩

26

雑草

27

盆踊り

28

朝

29

柿もぎ

30

秋の鳥

31

いも洗い

32

夕方のもり

33

菜洗い

34

さばのにおい

35

暗い夜

36

学校がえり

37

ざつこ(雑魚)

38

年貢

39

ふぶき

27

ふぶき

雪の朝

28

遺骨むかえ

二・二六じけん

29

綴方時間の思い

奉公

30

旅の姉の便り



1945
～
1959

32

げた

ねこ

子もり

33

春がきた

雪がとけたぞ

こままわし

34

乳しぼり

パチンコ屋

35

目がまわったとき

かわのかみさま

ぼこさま(かいこ)

36

勝手だ

父

シズエ

38

とと

39

ふろ

おさけ

40

十五夜

田なほ

米だわら

41

とりのこされたかぶな

いねもぎ

42

一ぴき一万円

おら山の子だ

43

百しようってふしぎだ

強くなりてえ

44

大根とり

木をかこってやる

牛が死んだ

46

稲

百姓

48

出かせぎにいく朝

村の若者

49

電球

もっこかつぎ

そり

けいとのでぶくろ

51

ていでん

3はやっぱり3

52

冬の風

53 ふぶきの音
とつあ

54 父は雪山こえて
いろりばた



1960
～
1969

56 はるがこねかな

春

とつきゆう白ちよう

57 しんたいけんさ

もぐら

58 きゆうしよくとうばん

子守

59 男だつたら

田うえ

60 どじようほり

まね木

61 おとうさん

62 ゴラという人

63 カーネーション

64 せんせい

ばしやひき

65 おかあさんのえ

ビー玉の中に

つきみそう

66 あさのほんどう

さめ

67 花火

68 お日さま

はさがたおれた

69 おかあさん

先生や

70 帰り道

かえる

いねのにおい

71 かわいそうな農業

給食の時、思ったこと

72 皇族家はとくしている

73 海に立つ

さみしい

74 出かせぎ

でかせぎはいやだ

75 とうきようのおとうさん

雪

76 おとうさんのでがみ

大きくなったら

77 おうしん

78 冬

おばばのむかしはなし

79 もち
80 こたつ
81 母のなわな
82 風の中を進むとり
冬の海



1970
～
1979

84 はがとれた

やぎ

85 おとうさんの手

大人になつたら

先生にききたいこと

86 かずやのよわむし

山は、つるの恩返し

87 あお虫

おもしろいしゃくとり虫

虫

88 買ひものをする母

夕日と祖母

89 おかあさんのミシン

おとうさん

90 病気でねているばちゃん

おねえさんは、つらい

91 おかあさん

92 村の人へ

朝の雪

93 出かせぎに行くとうちゃんへ

はたらきに行く父ちゃん

94 とうこうのとき

95 おとうさんのいない日

96 雪の顔

97 おばあさんのないしよく

雪ほりをするおかあさん

98 出かせぎにいくおとうさん

ふぶき

こめとぎ

99 とうちゃん

ある一日

100 へびのとうみん

おばあちゃん

101 道ふみ

ばちやのすげがさ

102 かあちゃん

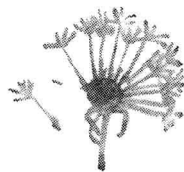
103 おじいちゃん

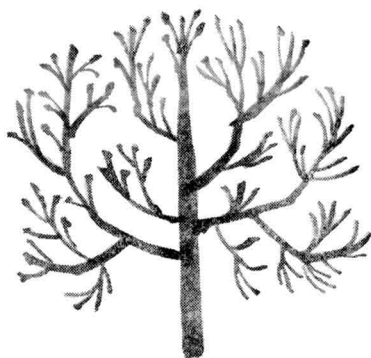
104 人生の終わり

105 農家

*

あとがき——新潟県の児童詩指導の歩み
この本の編集をした人たち





1918～1945

(大正7年)

(昭和20年)

ここからあとには、

* 日本の子どもの詩がうまればじめたころ。

* それが、ぐんぐんとよいものになっていったころ。

* おおきな戦争のために、せつかくの子どもの詩がおとろえるまでのころ。

こんなころのこの県の詩が、はじめの七編以外は季節にわけてならんでいる。

すみれ

長
シイ小3

すみれすみれ

そんなほんだまげなんかゆうて

およめにでもゆくのか

たんぽぽのところへでも

およめにゆくのか。

岩船郡女川校
ほんだまげりまるまげ

あお桐^{きり}

高島豊子 中1

風が静かに通る、

雨あがりの二階で、

あお桐の葉っぱで歌う、

長岡市表町校

8

もず

中村平作 小4

もずがきいきい、

のこぎりのめつける

音がする

秋空まるい。

西頸城郡能生町校

雁^{がん}

山本喜市 小6

焚火^{たきび}、

空にとろとろ

雁が散る。

中頸城郡新井校



ぐみ

水車のよこの白ぐみは、
誰も知らないよいぐみだ。
私が毎日いでも、
まだたくさんっている。
水車のよこの白ぐみは、
誰も知らないよいぐみだ。
私一人知ってるよいぐみだ。

中島ふじの小 6

中頸城郡妙高校

雪

雪ふるばんに
犬あるく
こっそりこっそり
犬あるく

小野ヨシイ 小 5

北蒲原郡黒川校

冬の日

石がぬれている、
いつまでも黒い、
冬の空暗い。

羽鳥きくい 小 6

中頸城郡新井校



キシヤゴツコ

今井 勇 小 1

イッチャサキノ
(イチバンサキ)

フミハ
(名前)

キカンシヤ

オラハ カモツ

オモシヤド
(オモシロイナ)

ポートヨエヤ
(イエヨ)

北蒲原郡加治校(指導)斉藤治

かえる

渡辺みよ小1

ばんげな

ほうばぶて かつかむかえ いった

かえるさんが ぴよんと とんだ

ほら ぴよんと とんだ

おいらも ぴよんと とんだ

かえるさんが ぴよんと とんだ

おいらも ぴよんと とんだ

ほうが けらけら わろうた

古志郡黒糸校(指導)寒川道夫
ほうばぶて 赤んぼをおんぶして / かつか 母親

春

大石喜四郎 小3

雪がつもっていても

春が近づいてくる。

川ばたの柳の芽、竹の子のようだ。

とよの下の梅の木も

花がさいている。

雨だれがぼたんぼたんおちて

今日はあったかい。

雪は川をうめているが

雪の下に水の音がきこえて

春が近づいているんだ。

新潟市長嶺校(指導)福住由美

しかられた

小形清次 小3

先生にしかられて

よびだされた。

おれと三二と、

常太郎と永吉。

おれは

鼻をこすられた。

徳七がいうんだ。

徳七を泣かそと思った。

北蒲原郡早通校(指導)遠藤稔

子守

小島由以 小3

こもりして 外に出たら

遠くの空に

月が出ていた

うちは

まだ 夕はんだないなあ。

北蒲原郡早通校(指導) 遠藤稔

春

熊倉信一 小3

朝起きて川へ

顔洗いに行った。

草が出ている。

猫柳はふくらんでいる。
ねこやなぎ

もう春が来たなと思った。

春はいいな。

ごはんたべてから

猫柳とりに行った。

春の道はいい、自転車にもれる。

小鳥がないている。

たんぼの雪も消えて来た。

古志郡黒桑校(指導) 寒川道夫

すずめ追

川内モト 小3

ねむいのに

おこされて

なわしろの

すずめ追いにいった

ほうと手をうつと逃げる

だれも見えない朝の田んぼで

すずめ追っている

岩船郡門前谷校(指導) 日下精二



春が来る

大関松三郎 小3

空のまん中は青空

めぐらの山々から、もくもく 白い雲が
ねじらけて出てくる。

青空は海、白い雲は 波みたいだ。

学校へ行く道を一足一足歩くと

波が

どぼう どぼう

寄せたり返したりしているような

気がして来る

雲の海から いきなり

太陽の暖かい光が出た

雪の原っぱが かがつぽく もち上ってくる

しぜん しぜんに 春が来る。

鳩が 羽をふって ぽくをのっこして行く。

古志郡黒糸校(指導)寒川道夫

めぐら＝まわり。かがつぽく＝まぶしい。
のっこして＝追いこして。

石うすひき

小池チャ 小3

学校からかえって行ったら、

おかあさんが石うすをひいていた。

私はいそいでかばんをおろして

てっだいに行った。

おかあさんの手の下へつかまっていった。

石うすはごろんごろんといってやかましい。

私がおかあさんに

「おれもひいたらおもたいか」ときくと

おかあさんは

「いや、かるい」といった。

それで、おかあさんの手の上で、

私は力いっぱいひいてひいている。

石うすの下から、

こなが白く、雪みたいに落ちてくる。

はこにこながいっぱいいたまった。

おかあさんが

「こんどはふいでおさねば」

と
い
っ
た。
。

岩船郡門前谷校（指導）日下精二

き
せ
る

高山義雄 小3

ぼくのうちに
長いきせるがある。

そのきせるで

たばこをすって

いたのだよ。

おばあさんは

ぼくの四つとき死んだ。

そのきせるを見ると

おばあさんが

まだ生きていてくれればいいがなあと

ときどき思う。

新潟市栄校（指導）植村秀吉



米
と
ぎ

石田ミヨ 小4

かがが米とげといわれた

「あい」といって

いどばたで米をといでいると

とりが来た

とりをあしでけんぼって

げたをぶつつけた

とりはけいけいといって

にげて行った

いどから水をくんで

バケツに入れた

水の音がざあときこえた

バケツに水をくんではんぶも入れた

ちつとといで水をまけるとしたら

米がこぼれた

その時どうしようと思つて

ふろていたら

かがが

「ほらこぼしたこと」といった

ながくといでいたら

手こちよばとなった

ばんげの米くわれると思つたら

うれしかった

いどのぞいたら

たもぎのかげがうつつて

水はたくさんある

つるべがく時がおもたい

北蒲原郡岡方第一校指導 後藤一夫

夕方

木島トモ 小6

使いの帰り道、蛙が鳴いていた

日が沈んで電燈が明かるく見える

やわらかい枯芝をふみふみいく

しつかりだいている醤油のにおい

山の腰を流れているもやのようにあわい

きよう初めて苗代作りに出たおかあさん

つかれて帰つたらう

おばあさんが

「ばんは仕事始めのお祝いだ」と、言った

どてかけの残り雪をとび越えようと

水田に月がうつつていた。

中頸城郡東田中校(指導)飯田義雄

写生

池田政雄 小6

やっと暖かくなった日

六年になって初めて写生に出た

高葉の原つばに

げんげの花が咲いて

土と若芽の匂いが

鼻の中にしみる

「菱岳と向かうの山小屋とこのブナ林を……」

先生の空色の帽子あつたかそうだ

雪の菱岳 御堂だけ黒い

ブナ林の雪 緑色だ

鉾かついで山を下りて来た忠蔵君のお父さん

ていねいに先生とおじぎした。